

## 児童の自由時間における遊びに関する事例研究

### — 自然学校における自由時間の行動について —

○長岡 雅美（武庫川女子大学） 永松 昌樹（大阪教育大学） 森 知香（株式会社モンベル）

#### I. はじめに

遊び環境（時間、空間、集団、方法）の変化にともない、児童の遊びは「群れ型」から「孤立型」へとシフトしてきた。子どもの戸外活動研究会による調査をみても、日常における自由時間での児童の遊びが、テレビ、ビデオ、コンピュータゲームを活用したものが高い比率を示していることを報告している（1995）。屋内での遊びの時間が増加しているのである。

しかし、屋外での活動的な遊びは、運動能力や体力を向上し、また、外遊びを通して、自然と接する中で、様々な発見や感動を経験することができる等、児童にとって必要不可欠な活動要素であると考えられる。児童の体力低下に関する問題については、「昭和60年以降、今日に至るまで、ほとんどの年齢段階で、体力・運動能力とも低下傾向にある。」（文部省「平成9年体力・運動能力調査報告書」1998）と述べられており、遊び形態の変化は、児童の健康問題に影響を及ぼしていると思われる。

ところで、兵庫県では昭和63年度より小学校5年生を対象とした「自然学校」（5泊6日）が行なわれ、平成2年度からは中学校の参加も始まった。この事業は「学習の場を教室から豊かな自然の中へ移し、児童が人とのふれあいや自然とのふれあい、地域社会への理解を深めるなど、さまざまな活動を年間指導計画に位置づけて実施することにより、心身ともに調和のとれた健全な児童の育成を目的とする。」と定め、次の4つの観点から5泊6日のスケジュールを組むこととなっている。

- ① 余裕のあるスケジュールで豊かな自然を体験できる。
- ② 児童の自主性を育成し、児童の手による主体的な活動を生み出す。
- ③ 期間の日程ではスケジュールが過密になりやすい上、児童の疲れがピーク時に終わることになりかねない。自然環境と生活環境に適応し、ねらいを達成するためには5泊6日は必要である。
- ④ 自然学校は1週間を1ユニットとして編成されている学校の教育課程に位置づけて実施されるので、1ユニットとしての1週間、5泊6日で実施する。

日常的な生活とは異なる時間や空間が児童に与えられることによって、児童の8割以上が「自然学校を終えたとき、楽しかった」（81.6%）と答え、その内容について「ともだちと仲良く過ごすことができた」、「活動が楽しかった」などの回答を示していると報告されている（兵庫県立南但馬自然学校、1997）。

また、キャンプファイヤー、ナイトハイク、登山・ハイキングなどが「感動した内容」として上位を占めており、「集団での活動の楽しさ」を共有している様子がうかがうことができよう。この楽しさは、組み込まれた活動プログラムのなかだけにとどまらず、自然学校での自由時間の過ごし方にも何らかの姿で現れるのではないだろうか。

そこで、自然学校という日常とは異なる環境に囲まれた中で、児童の遊びが日頃の遊びとどのように変化するかについて着目することとした。本研究では、児童の遊び空間に着目し、「異なる遊び空間において、児童の遊びに変化がみられる」という仮説のもと、学校や放課後における児童の自由時間と、自然に囲まれた中での自由な時間に展開される遊びについて検証することを目的とした。

本稿では自然学校での自由時間に児童がどのような過ごし方をしているのかについて分析を進めることとした。日常的な環境とは異なる自然学校のなかで、「児童に遊びの変化がみられるのか」という点に着目し、プログラム外の自主的な行動をみることが可能な昼食後の昼休みについて報告したい。

## II. 研究の方法

1. 調査方法：質問紙による集合一斉調査（小学校および自然学校での3回）
2. 調査対象：兵庫県内で、自然学校に参加した小学校5校の第5学年（345名）

表：分析対象者人数構成（人）

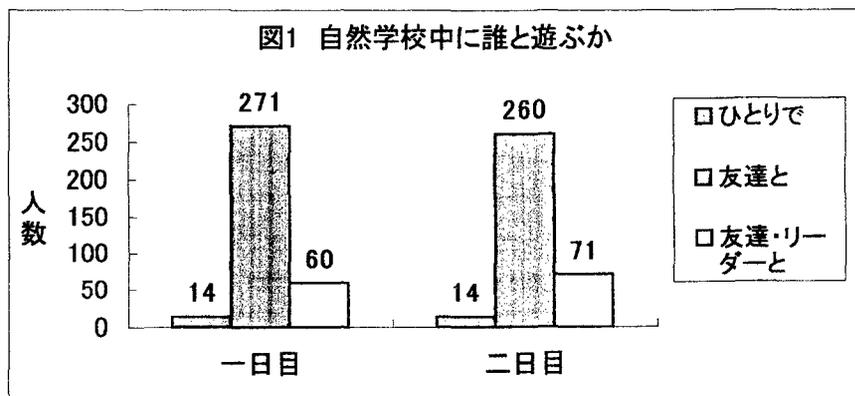
	A 小学校	O 小学校	K 小学校	T 小学校	N 小学校	合計
男子	75	27	23	23	18	166
女子	70	40	18	21	30	179
合計	145	67	41	44	48	345

3. 調査期間：平成12年5月15日～7月15日
4. 調査内容：兵庫県立南但馬自然学校の職員による研究紀要の資料及び、その調査用紙を参考にし、作成した。
5. 分析方法：質問紙調査の結果を各項目について単純集計を行い、必要な項目については、クロス集計・ $\chi^2$ 検定を行った。

## III. 結果－自然学校での遊び－

### 1. 遊び仲間

自然学校の昼休みに誰と遊んだかという質問に対して、調査一日目では、「ひとりで」が4.1%、「友達と」が78.6%、「友達・リーダーと」が17.4%となった。そして、二日目の調査においては、「ひとりで」が4.1%、「友達と」が75.4%、「友達・リーダーと」が20.6%であった（図1）。

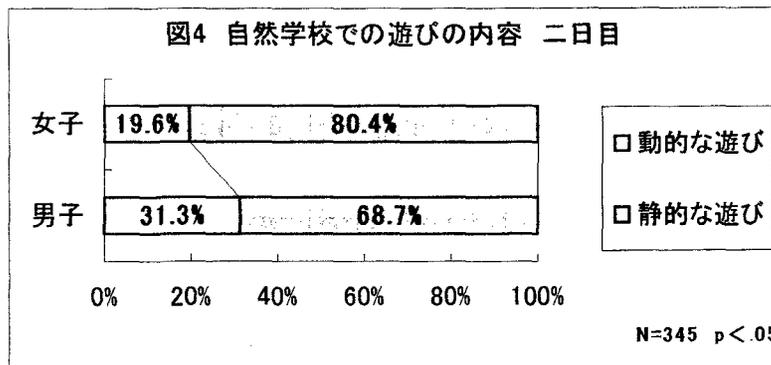
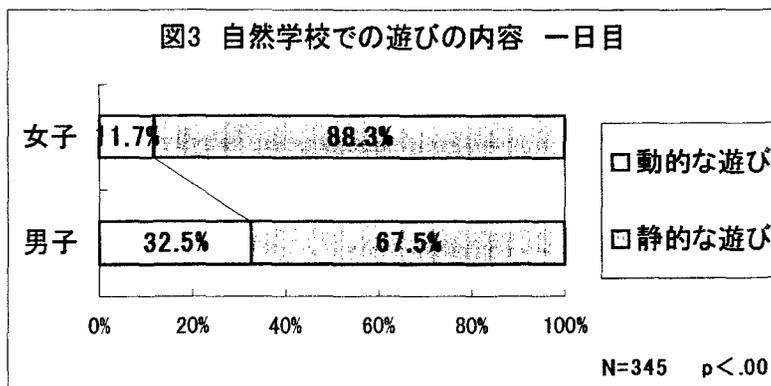
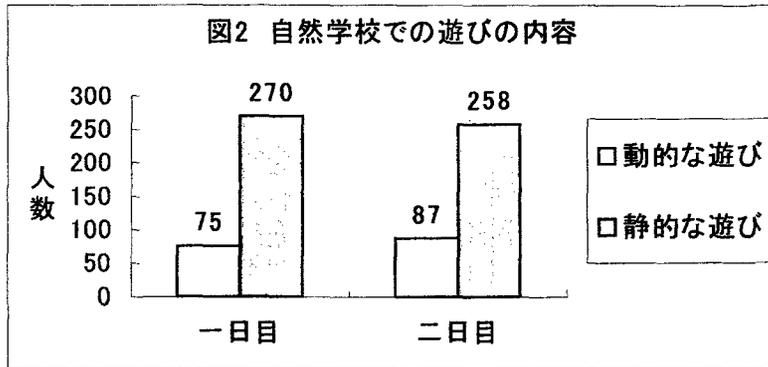


### 2. 遊びの内容

自然学校中の昼休みにおいて何をして遊んだかについて質問したところ、一日目の調査で上位3項目は、「おしゃべり」が最も多く40.0%、「トランプ・ウノ」が30.4%、「鬼ごっこ」が3.8%となっていた。二日目の調査においても、最も多い回答が「おしゃべり」で39.4%、「トランプ・ウノ」は27.8%、続いて「鬼ごっこ」が8.1%となっていた。2日間とも女子は男子より、「おしゃべり」をすることが多く、男子は女子より「トランプ・ウノ」をすることが多かった。

さらに、遊びの傾向を明らかにするため、この質問項目において、「動的な遊び」、「静的な遊び」に分類した。その結果、一日目の調査では、「動的な遊び」が21.7%、「静的な遊び」が78.3%となっており、二日目においては、「動的な遊び」は25.2%、「静的な遊び」は74.8%であった（図2）。また、これ

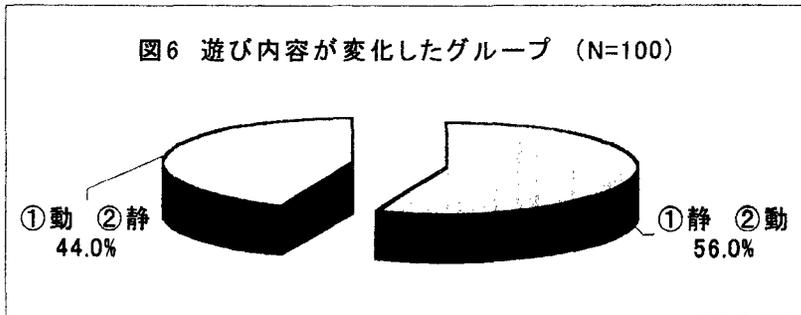
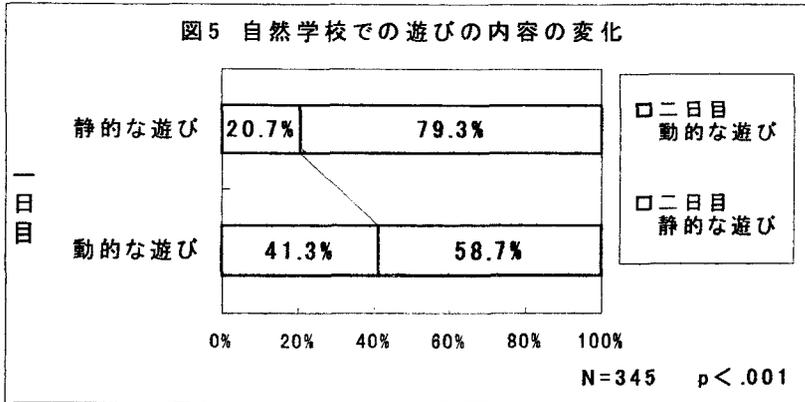
を性別においてクロス集計をしたところ、両日ともに有意差がみられた。その内容は、男子は女子に比べ、「動的な遊び」が多く、それに対して女子は男子より、「静的な遊び」が多かった (図3、4)。



さらに一日目と二日目の遊びの内容についてクロス集計をした結果、0.1%水準でその両者に有意差がみられた。一日目も二日目も「静的な遊び」をしていた児童が最も多く、全体の62.0%を占めていた。また、一日目も二日目も「動的な遊び」(16.2%)をする、一日目も二日目も「静的な遊び」(62.0%)をするというように、全体の71.0%の児童では二日間とも遊びの内容に変化がみられなかった。

しかし、全体の29.0%の児童に、一日目と二日目における遊びの内容の変化がみられた。その中で、12.8%の児童が一日目から二日目において「動的な遊び」から「静的な遊び」へと遊びの内容が変化し、

また 16.2%の児童が一日目から二日目において「静的な遊び」から「動的な遊び」へと遊びの内容に変化がみられた(図 5)。そして、遊びの内容が変化したグループ(「一日目に静的で二日に動的な遊びをした児童」と「一日目に動的で二日に静的な遊びをした児童」)において図 6 に示したとおり、変化したグループの中では一日目に静的な遊びをして、二日に動的な遊びをする児童の方が多かった。



#### IV. まとめ

自然学校における自由時間では、静的な活動が多いという結果が示された。この背景には自然学校でのプログラムの内容が活動的な内容が多く、また、スケジュールも過密になっているために少しでも身体を休ませたいという気持ちが屋内にとどまらせていると推察することができよう。また、自然に囲まれた自然学校施設のなかでの自由な時間を、どのように遊ばよいかかわからないということも関連しているのではないだろうか。しかしながら、一日目に比して二日目の昼休みには、動的な遊びを行なう女子が増加した。施設の配置や用具の利用方法に対する認識が深まり、さらに大きな広場の存在を確認できたことによって活動的な行動が生まれたと考えることもできそうである。

本研究では、プログラムの内容についての検討は行なわなかったため、自由時間前後のプログラムの影響について言及することができなかった。また、他の利用者、あるいは指導的な立場にある教員や施設の職員とリーダーの存在といった部分についても、その影響は少なくないであろう。このような要因についても加味した上で、児童と遊び環境について考えていく必要がある。社会環境や生活環境の変化によって、児童の遊びは受け身的で単一化になるなど、遊び自体に変化がみられ、また変化せざるを得ない状況になっているのではないと思われる。児童期における遊びの大切さを大人が認識し、遊びの学習的な機能という観点に立って、児童が自発的に遊ぶことのできる環境(時間・空間・集団・方法)を提供し、それをサポートする必要がある。日常的な環境から離れ、自然のなかで行なわれる生活体験の場は子どもたちが遊びに目覚める格好の機会となるだろう。